

宮ノ台式土器の研究（6）

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

これまで宮ノ台式土器についての研究史や基準資料の検討等を行ってきたが、今回は宮ノ台式土器後半段階の神奈川県内における地域色について検討を試みることにする。

検討対象は、これまでに「宮ノ台式土器の研究（1）～（5）」（弥生時代研究プロジェクトチーム2002～2006）で検討を加えてきた大別5段階、細別7段階の区分のうち、宮ノ台式土器の後半段階にあたるIV段階、V段階前半、V段階後半の時期とする（註1）。分析対象とする遺跡は、折本西原遺跡と砂田台遺跡とを県内の東西両地域を代表する遺跡として取り上げ、その間に位置する池子遺跡群と下寺尾西方A遺跡を加えた4遺跡とする。

宮ノ台式土器に見られる地域色については、これまでに安藤広道、犬木 務、小倉淳一、黒沢 浩、宍戸 信悟らによって言及されていて、これらの研究概略については『研究紀要7』においてかつてまとめた（弥生時代研究プロジェクトチーム2002）。よって、これまでの研究における地域色に関する指摘を踏まえて、今回は壺形土器の文様構成を検討対象として下記の4項目を分析項目として設定し、遺跡ごとの様相の違いを抽出し比較検討することとする。

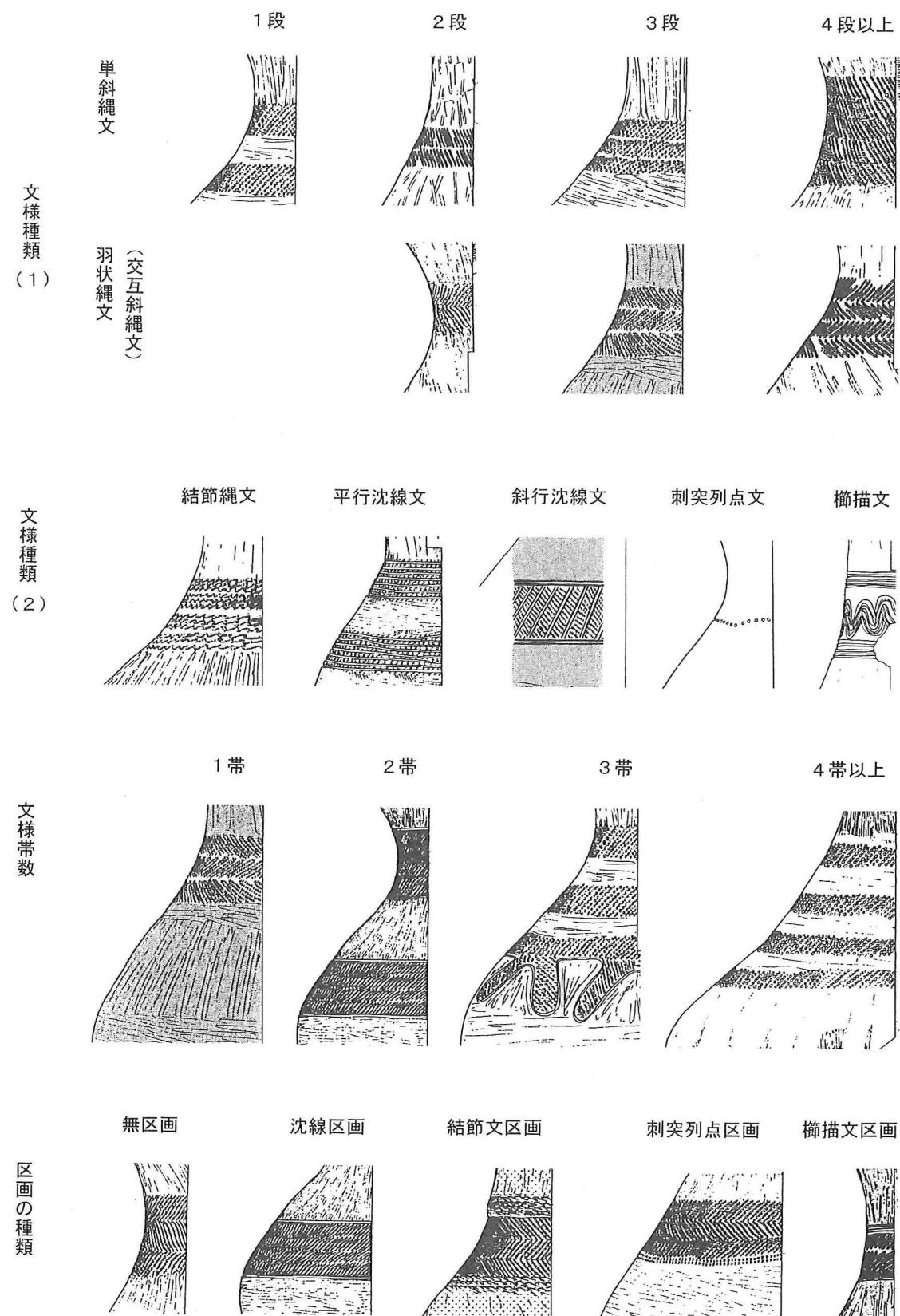
分析方法と項目の設定等については飯塚美保、池田 治、櫻井真貴、新開基史、渡辺 外で協議し、資料のグラフ化は池田が行った。執筆は池田、櫻井、新開、渡辺で分担し、池田が編集した。分担は各文末に記した。

（池田）

1. 検討項目の設定

これまでの研究の成果に基づき、地域色を検討するための集計・分析項目として、文様帯の数、文様帯区画の種類、帯縄文帯の縄文構成、帯縄文帯の施文段数の4項目を用意した。各項目に関わる分類の模式図を第1図に示した。分析対象とした土器資料は、基本的には頸部最小径以下一胴部最大径以上の文様帯数が把握できる図化された土器とした。なお、この範囲の全てが残っていない資料にあっても、文様帯数が推測できる程度の資料は、「文様帯区画の種類」以下の3項目については集計対象に加えている（註2）。このため、文様帯数の集計対象とした個体数とそれ以外の分析項目の集計対象となった個体数は異なっている。また、1つの土器に2つ以上の文様帯がある場合などの文様帯区画や文様構成、縄文構成（施文方法）の集計については、1つの土器で同じ文様や要素が何回出現しても1としているが、2種類の文様が施文されている場合にはそれぞれ1としているので、分析対象の土器個体数と文様別集計数の合計とは一致しない。それぞれの分析項目ごとに集計対象の合計数をもって100%としている。

○文様帯の数 文様帯の減少、無文化の傾向を示す指標でもあるが、文様帯数の構成比に地域色が現れる可能性がある。集計対象とした資料は、頸部最小径以下一胴部最大径以上の文様構成が把握できる図化された土器とした。文様帯の集計は、横帯文帯（横位の帯状文様帯）を計数することとし、結紐文や鋸歯状文などの意匠文は数えていない。横帯文と横帯文の間に無文帯もしくは意匠文を挟む場合に、別の文様帯として数



第1図 集計要素の模式図

えている。「無文」については、頸部最小径以下～胴部最大径以上の範囲に文様がないことを確認できる資料をもって無文として扱った。このため、口縁部外面に文様帯があるものについても、頸部以下に文様が施文されていないものは「無文」に含めている。

○文様帯区画の種類 時期が下るにつれ無区画縄文帯が盛行する傾向にあると指摘されていて、その変化傾向および区画方法の種類に地域差が現れる可能性を考えた。沈線区画、櫛描文区画、刺突列点区画、結節縄文区画と文様帯に区画が無いもの（無区画）に分けた。横帯文帯を対象とし、意匠文を縁取る沈線などは集計対象としていない。

○帶縄文帯の縄文構成（施文方法） 結節縄文は東京湾東岸地域に多く、東京湾西岸地域および相模湾沿岸地域では使用頻度が低いと指摘されるように、縄文原体の種類や施文方法の区別に地域色が現れる可能性が高い。ここでは原体の細分までは踏み込みます、斜縄文の施文方法の区分を主として、従属的に結節縄文とその他の縄文の出現率を示すこととした。斜縄文は主として無節又は単節縄文を文様の長軸方向に沿って回転させたものであるが、ここでは、同一の原体もしくは同一方向の撫りの原体による斜縄文で構成される文様を単斜縄文とする。対して羽状縄文（羽状構成縄文=交互斜縄文）は撫りの異なる斜縄文を上下に交互に並べて回転させ羽状に文様を施したものとし、羽状施文となるように原体を作っている羽状縄文もここに含めている。結節縄文は所謂S字状結節文を複数条で1単位とする構成の原体を回転させて施文するもので、神奈川県域における宮ノ台式土器では、主体的な文様要素とはならない。

○帶縄文帯の施文段数 文様帯の単純化、縮小化と関連する指標であるが、縄文構成（施文方法）とも関連していて、施文段数の多少や変化推移が地域色を示すと考えられる。上記の縄文構成（施文方法）における斜縄文1単位の施文を1段として数える。よって羽状縄文（羽状構成縄文）は最少段数が2段である。なお1つの土器において2帯の文様帯で異なる段数で施文している場合には、最大の施文段数をもって代表させて集計している。

（池田）

2. 対象遺跡の特徴

○折本西原遺跡（第7図）

横浜市都筑区折本町に所在し、鶴見川の沖積低地を見下ろす下末吉台地上に立地する環濠集落である。調査は部分的であるが、集落面積が最大の時期で70,000m²以上と推定され、環濠内から竪穴住居のほか、大型

方形周溝墓も見つかっている。宮ノ台式期の中頃から終末（Ⅲ段階からⅤ段階後半）の遺跡である。

集計対象は76個体である。頸部～胴部文様帯の数については、無文が49%、1帯45%、2帯2%、3帯4%であり、ほぼ無文もしくは1帯に2分され、2帯以上の比率が圧倒的に少ない。文様帯区画の種類は、無区画71%、沈線区画20%、櫛描文区画2%、刺突列点区画7%であり、結節縄文区画は皆無である。ほぼ3：1の割合で無区画が主体を占め、次いで沈線区画が多く、他の3遺跡に比して刺突列点区画の比率が大きい。出現する文様種類のうち約79%



第2図 対象遺跡の位置

を占める帶縄文帯の構成では、単斜縄文67%、羽状縄文27%、結節縄文6%と、主体となる単斜縄文と羽状縄文の比率はほぼ2:1となる。また、結節縄文は決して高い比率ではないが、他の3遺跡と比べると無視できない出現率である。帶縄文帯の施文段数は、1段が13%、2段が34%、3段22%、4段以上31%であり、4段以上の多段の比率は他の3遺跡と大きな差は無いが、1~3段のうち、2段の比率が高く1段の比率が低いことが特徴である。

(新開)

○池子遺跡群No.1-A地点（第8図）

三浦半島の付け根にあたる逗子市池子に所在し、逗子湾に注ぐ田越川支流の池子川が解析した樹枝状の谷戸に展開する遺跡群である。No.1-A地点は谷戸入口部にあたり、旧池子川の流路が調査区中央を蛇行し、その周囲に居住域・墓域がある。遺物は自然流路内から大量に出土している。出土土器は宮ノ台式期の中頃から後半（Ⅲ~V段階）が中心であるが、Ⅱ段階や終末（V段階後半）の土器も出土している。今回集計したV段階の資料は、いずれも前半に属する資料である。

集計対象は88個体である。頸部~胴部文様帯の数を見ると、無文が50%で、以下1帯23%、2帯17%、3帯9%、4帯以上1%と、半数が無文であることは他の3遺跡とほぼ共通するが、文様帯を持つ個体中では1帯が主体を占めるものの、2・3帯が合計で26%と半数以上を示し、特に2帯が1帯に近い比率で出現する点を特徴とする。また、3帯では高い比率で結紐文（二叉文）や鋸歯文などの意匠文が付加される点も注目される。文様帯区画では、無区画が79%、沈線区画13%、刺突列点区画4%、結節縄文区画4%となり、ほぼ3:1の割合で無区画が主体を占め、次いで沈線区画が多い点では砂田台遺跡・折本西原遺跡と差は認められない。出現する文様種類のうち約71%を占める帶縄文帯の構成では、単斜縄文60%、羽状縄文38%、結節縄文2%と、単斜縄文が主体的であるが、単斜縄文と羽状縄文の比率がほぼ3:2と、羽状縄文もそれなりの比率を占めている。また、帶縄文帯の施文段数では、1段22%、2段18%、3段22%、4段以上37%であり、4段以上の多段の比率が最も高いが、他の3遺跡に比して1段の比率が高く、1~3段が拮抗することが特徴として挙げられる。

(新開)

○下寺尾西方A遺跡（第9図）

県中央部を流れる相模川の東側、茅ヶ崎市下寺尾に所在し、小出川が形成した沖積低地に面した舌状台地の先端部に立地している。遺跡は、隣接遺跡も含めて新旧2本の環濠がめぐる弥生時代中期後半の環濠集落であることが確認されていて、環濠内側の面積は県下最大級と推定される。弥生時代中期の遺構は新旧2本の環濠、竪穴住居、土坑などが発見されていて、宮ノ台式期の中頃（Ⅲ段階）から後半が主体の遺跡と考えられるが、前半期から開始している可能性がある。

2002年の調査では竪穴住居跡から良好な一括資料が得られているが、遺跡が保存されることになったために完掘した遺構は少なく、今回の分析対象となった資料数は少ない。このため時期別の分析を行うことは出来なかつたが、県央部に所在する代表的な遺跡として取り上げ、Ⅳ段階以降の様相について総体的比較の対象として提示した。集計対象資料は総数25個体である。Ⅳ段階からV段階を通しての全体的な様相は、項目によっては資料数の少なさによる偏りが現れている可能性があるが、文様帯区画の種類において無区画の比率が他の遺跡に比べて明らかに低く、そのぶん沈線区画および櫛描文区画の比率がやや高くなっていることと、帶縄文帯の施文段数において2段施文の比率が半数以上を占める（54%）ことが遺跡の特徴として挙げられる。帶縄文帯の縄文構成は単斜縄文（54%）と羽状縄文（46%）がほぼ半々であり、頸部~胴部文様帯の数では無文（48%）と1帯（48%）でほとんどを占め、2帯以上は少数である。

(池田)

○砂田台遺跡（第10図）

県中央部を流れる相模川の西側、秦野市南矢名に所在し、金目川と大根川に挟まれた北金目台地の北側突端部に立地している。弥生時代中期後半の遺構は、新旧2本の環濠、堅穴住居、溝状遺構、方形周溝墓、土坑が発見されていて、宮ノ台式期の前半（Ⅱ段階）から終末まで続く遺跡である。

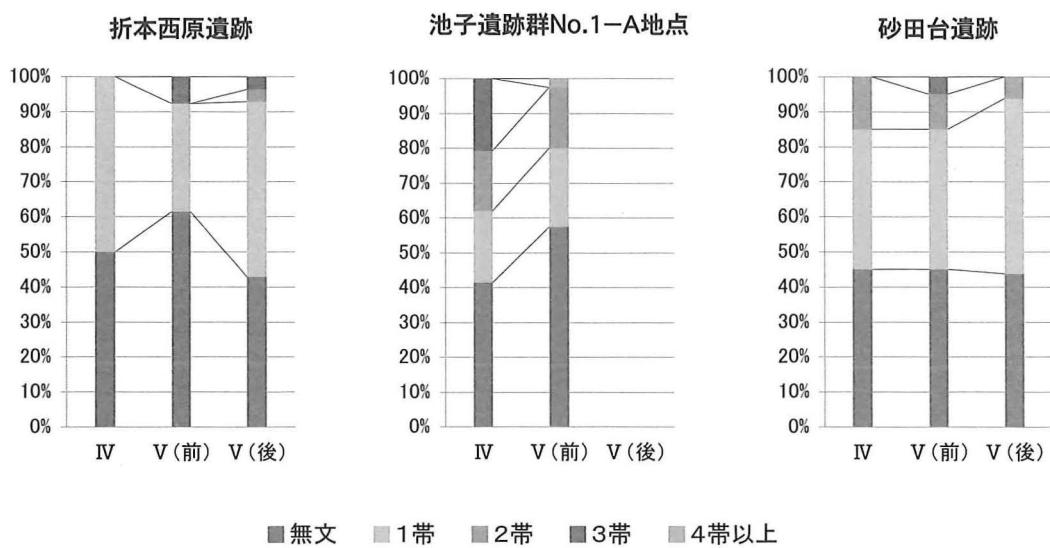
集計対象資料は総数87個体である。頸部～胴部文様帯の数は、無文（44%）と1帶（43%）がほぼ同比率を占め、2帶（11%）と3帶（2%）が若干存在しているが、2帶の占める比率は他の3遺跡よりも高い。文様帯区画の種類は無区画（75%）が大多数を占め、次いで沈線区画（17%）が多く、この2種で90%余りを占める点は折本西原遺跡や池子遺跡群No.1-A地点と同様の傾向を示すが、櫛描文による区画がやや多い比率となっている。出現する文様種類のうち約84%を占める帶縄文帯の構成では、単斜縄文が25%、羽状縄文が75%であり、3/4を羽状縄文が占める状況は他の遺跡と大きく異なる特徴である。帶縄文帯を構成する縄文の施文段数は、3段（41%）が最も多く、次いで4段以上（30%）、2段（23%）、1段（5%）の順であり、1段の比率がきわめて少ないと3段以上の多段構成が7割以上の高率である点が特徴である。これは3段および4段以上で構成される羽状縄文帯が多いことによるものである。 （池田）

3. 項目別の分析

○頸部～胴部文様帯の数（第3図）

集計された資料数は、折本西原遺跡47点、池子遺跡群No.1-A地点78点、砂田台遺跡56点である。

折本西原遺跡では、IV段階において無文と1帶が半々であるのに対し、V段階前半においては一時的に無文の割合が増し1帶が減少する一方、3帶が出現する。V段階後半では1帶・3帶が若干量存在するが再び無文と1帶のものが拮抗した比率を占めるようになる。池子遺跡群No.1-A地点においては、IV段階からV段階前半にかけて無文のものの比率が増すところは、折本西原と同じ傾向であるが、一定の割合で両時期とも1帶・2帶のものの比率が維持され、V段階前半には3帶のものが見られなくなり代わりに4帶のものが若干存在している。砂田台では各時期を通して無文のものが50%弱を占め、また1帶・2帶のものも比較的安定して存在している。小さい変化ではあるが時期を追って2帶のものが減少する傾向にある。V段階前



第3図 頸部～胴部文様帯数の比較

半においては3帯のものも存在するが、わずかである。

頸部～胴部文様帯の数は、各遺跡とも総体的には無文のものが50%前後の比率で存在していることが共通しているが、時期別の推移をみると折本西原遺跡と砂田台遺跡が比較的安定的であるのに対して、池子遺跡群No.1-A地点では明らかな増加傾向を示している。また、折本西原遺跡と砂田台遺跡では1帯のものが40～50%程度で安定的に推移しているのに対して、池子遺跡群No.1-A地点ではV段階後半への変化が明らかに出来なかったものの、無文が増加するのに対して1帯と2帯は安定した比率を占め、合わせて40%程度であることがきわめて特徴的である。

(櫻井)

○文様帯区画の種類（第4図）

集計された資料数は、折本西原遺跡47点、池子遺跡群No.1-A地点70点、砂田台遺跡56点である。

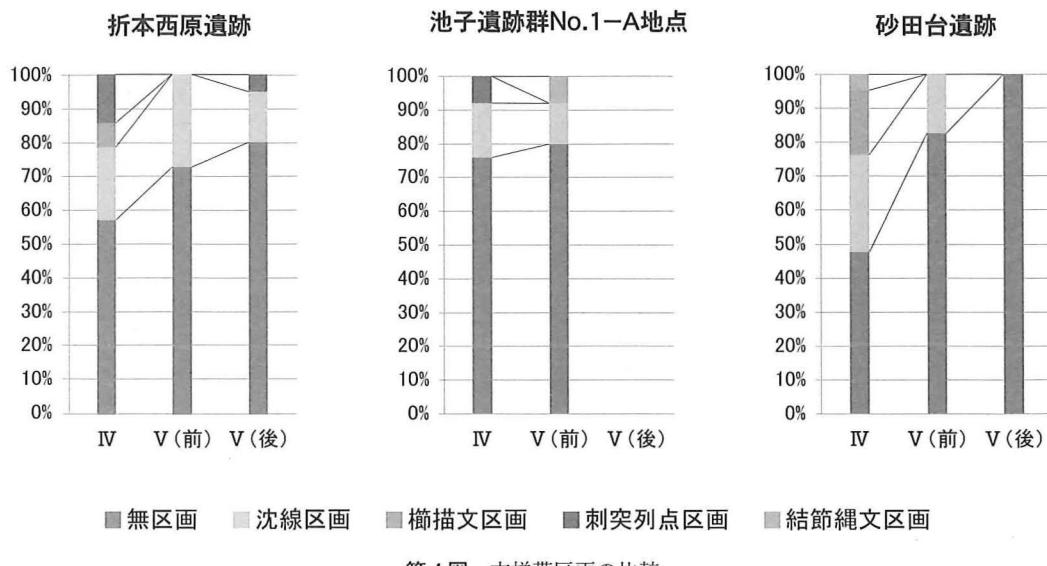
文様帯区画の種類については、推移は資料が少なく分析対象から除外した池子遺跡群No.1-A地点のV段階後半を除けば、概ね同じような傾向が見て取れる。つまり無区画が大半を占め、時期が新しくなるにつれその比率が増大している。またIV段階においては、沈線区画、櫛描文区画、刺突列点区画、結節縄文区画が一定の割合で混在している。無区画を含めて折本西原遺跡と砂田台遺跡では4種類の、池子遺跡群No.1-A地点においても3種類の区画方法が認められるが、V段階前半になると池子遺跡群以外は2種類となってしまい、圧倒的に無区画が高比率となる。V段階後半ではさらに無区画の比率が高まり、折本西原遺跡においては8割を占め、砂田台遺跡においては対象資料のすべてが無区画となってしまう。必ずしも全資料において他の区画方法が皆無になるわけではないが、圧倒的に無区画化の傾向にあることを示していく、砂田台遺跡の特徴となっている。

(櫻井)

○帶縄文帯の縄文構成（第5図）

対象となる資料は、折本西原遺跡と池子遺跡群No.1-A地点がそれぞれ48点、砂田台遺跡56点である。

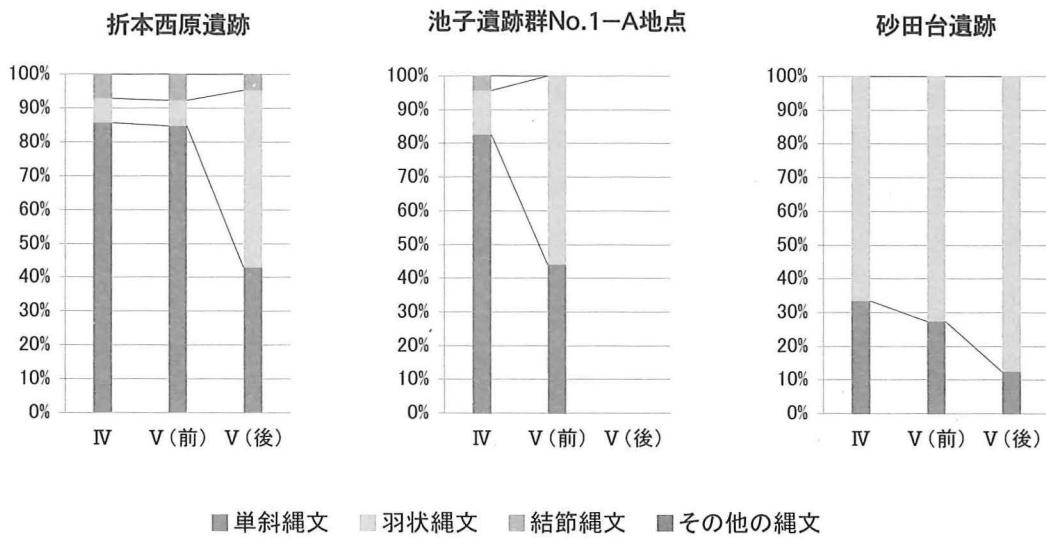
これらの資料について、帶縄文を構成する文様要素としての縄文の施工方法に着目すると、単斜縄文、羽状縄文、結節縄文の3種に大別できる。この3種の縄文による構成比率を各遺跡において時間的な推移と共にみていくと、構成比率そのものについては折本西原遺跡と池子遺跡群No.1-A地点が近似し、砂田台遺



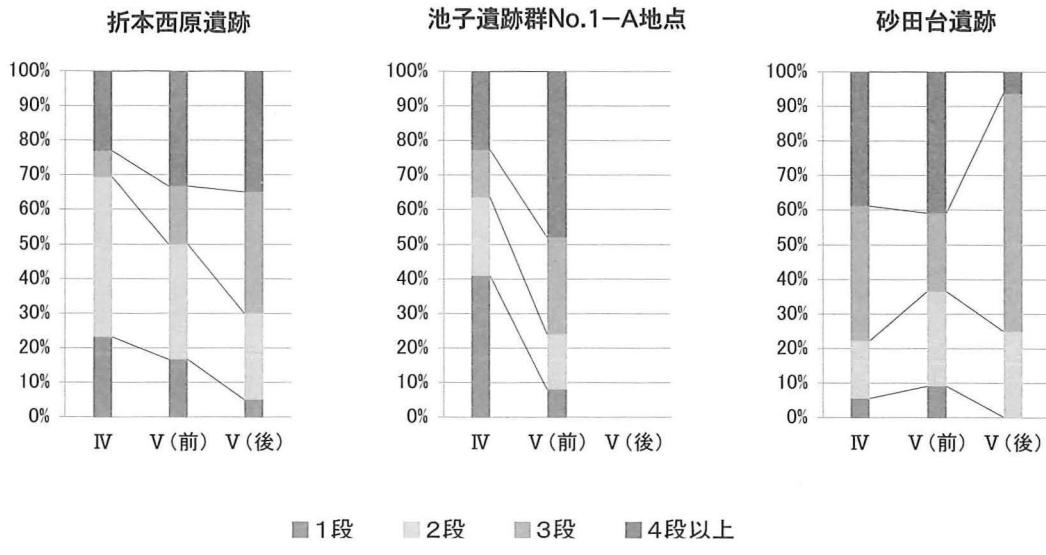
第4図 文様帯区画の比較

跡の場合は前2者とは全くと言って良いほど異なる状況が認められる。

折本西原遺跡では、IV段階で単斜縄文が85%と圧倒的な比率を占め、残りは羽状縄文と結節縄文の例が1点ずつ存在している。この傾向はV段階前半でも殆ど変わらないが、V段階後半に至って単斜縄文と羽状縄文の両者がそれぞれ約45%程度を占めるようになり、急激な変化を見せる。こうした構成比率とその推移については、池子遺跡群No.1-A地点の旧河道から出土した資料の場合でもほぼ同様の傾向を見せる。異なる点は、折本西原遺跡でV段階の前半から後半にかけて起きた変化が、V段階前半で既に発生しているところであろう。砂田台遺跡では、単斜縄文と羽状縄文の両者しか見られず、IV段階で羽状縄文が65%程度を占めている。次いでV段階の前半から後半へと推移していくに伴ってその比率は更に増加し、90%近くを占めるようになる。



第5図 帯縊文帯の施文段数の比較



第6図 帯縊文帯の施文段数の比較

これら3遺跡における様相が、そのままそれぞれの地域の傾向として捉える事が出来るかどうかは今後の課題となるが、県東部の遺跡（折本西原遺跡（下末吉台地）、池子遺跡群（三浦半島））と県西部の遺跡（砂田台遺跡（金目川流域））が示す相違性は、帶縄文帯の施文段数においても認められる。

(渡辺)

○帶縄文帯の施文段数（第6図）

対象となる資料は折本西原が45点、池子が47点、砂田台が56点である。ここでは单斜縄文と羽状縄文における縄文の施文段数を対象としている。施文された帶縄文帯の縄文の段数は、当然ながら文様要素の選択や文様構成のあり方と連動するものであり、遺跡毎に比較してみると、その推移と比率については折本西原と池子が近似し、砂田台が前2者とは異なるという状況が認められる。

折本西原遺跡では、IV段階では施文段数が1～2段のものが70%近くを占めるのに対し、V段階後半では30%未満に減少し、残りを3段以上のものが占めている。こうした傾向は池子遺跡群No.1-A地点の資料にも共通し、IV段階からV段階への変化としてさらに顕著である。

一方、砂田台遺跡ではIV段階で既に3段以上のものが80%近くを占めており、3段及び4段以上のものがほぼ同じ比率であったところが、V段階後半で3段の例が6割に増加する、という変化が見られる。しかしながら、全体の傾向として1～2段と3段以上の両者の比率で見た場合、大きな変化はなくV段階後半においても3段以上が80%近くを占めている状況である。この点は、土器の頸部～胴部における文様帯数の変化が非常に少ないこととも関連しているものと考えられる。

(渡辺)

まとめ

宮ノ台式土器のIV段階、V段階の壺形土器の文様に見られる様相を取り上げ、地域色の検討を試みた。

集計・分析の結果、壺形土器に施文された帶縄文帯の縄文構成と施文段数において、県東部の遺跡（折本西原遺跡・池子遺跡群）と県西部の遺跡（砂田台遺跡）とで明白に様相の違いが認められ、砂田台遺跡における羽状縄文の多用と縄文施文段数の多段施文が特色として示された。また池子遺跡群では、有文の資料のうち頸部～胴部文様帯数において2帯の比率が高いという特徴が見られた。

集計した資料数の制約もあり、少ない個体数を対象とした分析となってしまった。従来から指摘されてきた事柄を追認しただけである点もあるが、しかしながら地域色に関連すると考えられる傾向を示すことができたのではないかと思う。これらの特徴が遺跡単位の個性に過ぎないか遺跡周辺の地域色として認められるものであるかは、対象とした遺跡周辺のデータで検証しなければならない課題である。

(池田)

註

1. 「宮ノ台式土器の研究（1）」（弥生時代研究プロジェクトチーム2002）で示した編年対照表の12区分のうち、9・10をIV段階、11をV段階前半、12をV段階後半として扱った。各遺跡の遺構の所属時期は、基本的に報告書の時期区分・分類に従って、前記編年対照表による対応に拠った。
2. この点は集計資料数の制約を緩和するためであるが、同時に抽出対象の選定に不徹底さが残ることもなった。

文献

弥生時代研究プロジェクトチーム 2002～2006 「宮ノ台式土器の研究（1）～（5）」『研究紀要7～11』（財）かながわ考古学財団

※4 遺跡に係る発掘調査報告書については省略した。『研究紀要8』に記載した文献一覧を参照されたい（弥生時代研究プロジェクトチーム2003）。

折本西原遺跡

文様帯(横帯文)の文様種類

単斜縄文				羽状縄文(交互斜縄文)			結節縄文	その他の縄文	擬縄文	沈線文			櫛描文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上				平行沈線	斜行沈線	刺突列点	
6	13	5	8	2	5	6	3	0	0	6	1	2	4

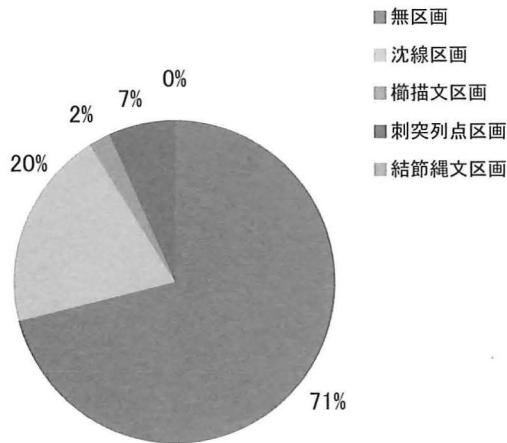
頭部～胴部文様帯の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
23	20	1	1	0	2	0	0	0

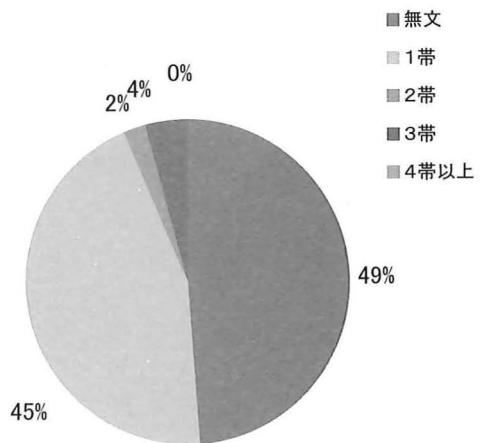
文様帯区画の種類

無区画	沈線区画	櫛描文区画	刺突列点区画	結節縄文区画
32	9	1	3	0

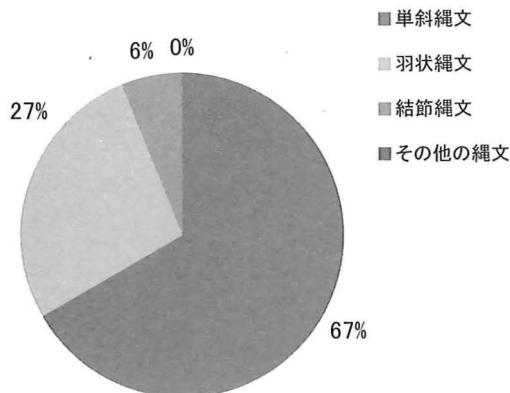
文様帯区画の種類



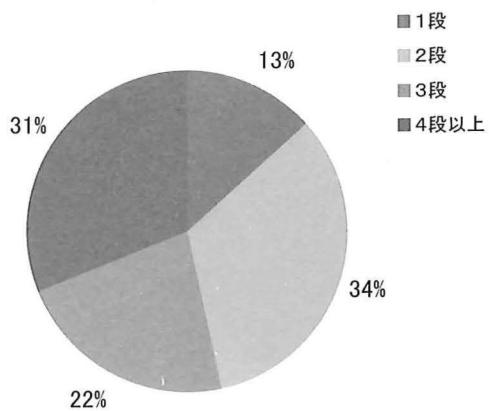
頭部～胴部文様帯の数



帯縄文帯の縄文構成



帯縄文帯の施文段数



集計対象遺構: (折本西原) Y1号住、Y2号住、Y4号住、Y5号住、Y8号住、Y9号住、Y13号住、Y15号住、Y17号住、Y18号住、Y22号住、Y28号住、Y34号住、Y35号住、Y37号住、Y40号住、Y44号住、Y48号住

(折本西原- I) 3号住、4号住、5号住、6号住、7号住、8号住、10号住、11号住、13号住、14号住、15号住、17号住、18号住、19号住、20号住、21号住、22号住、23号住、25号住、26号住、27号住、28号住、29号住、31号住、33号住、36号住、37号住

第7図 折本西原遺跡の壺形土器の文様様相 (IV・V段階)

池子遺跡群No.1-A地点

文様帶(横帶文)の文様種類

単斜縄文				羽状縄文(交互斜縄文)			結節縄文	その他の縄文	擬縄文	沈線文			櫛描文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上				平行沈線	斜行沈線	刺突列点	
11	7	6	6	2	5	12	1	0	0	11	1	1	7

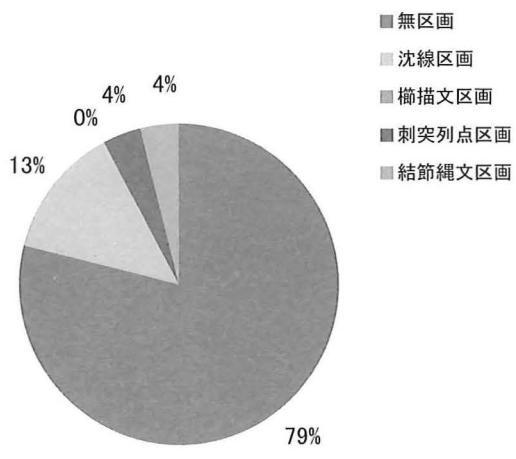
頸部～胴部文様帶の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
35	16	0	9	3	1	5	1	0

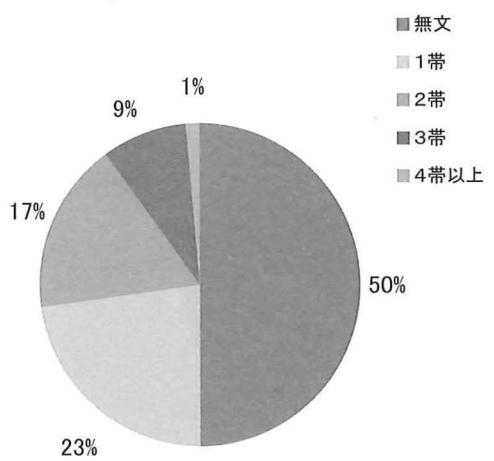
文様帶区画の種類

無区画	沈線区画	櫛描文区画	刺突列点区画	結節縄文区画
41	7	0	2	2

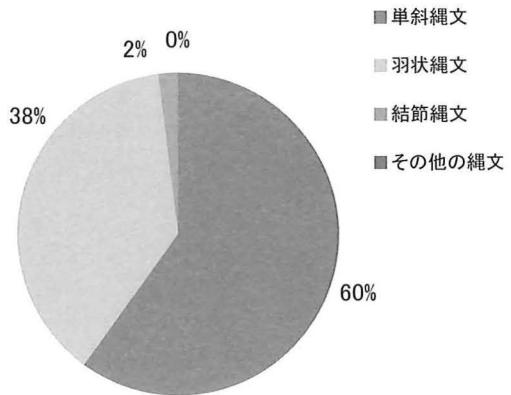
文様帶区画の種類



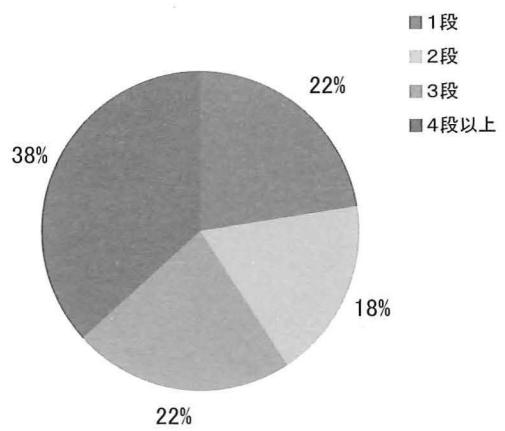
頸部～胴部文様帶の数



帯縄文帯の縄文構成



帯縄文帯の施文段数



集計対象遺構: No.1-A地点自然流路

第8図 池子遺跡No.1-A地点の壺形土器の文様様相.(IV・V段階)

下寺尾西方A遺跡

文様帶(横帶文)の文様種類

单斜縄文				羽状縄文(交互斜縄文)			結節縄文	その他の縄文	沈線文			櫛描文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上			平行沈線	斜行沈線	刺突列点	
2	5	0	0	2	1	3	0	0	0	0	0	1

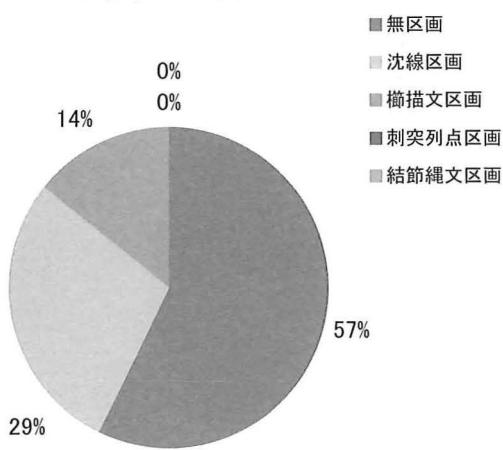
頸部～胴部文様帶の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
10	10	0	1	0	0	0	0	0

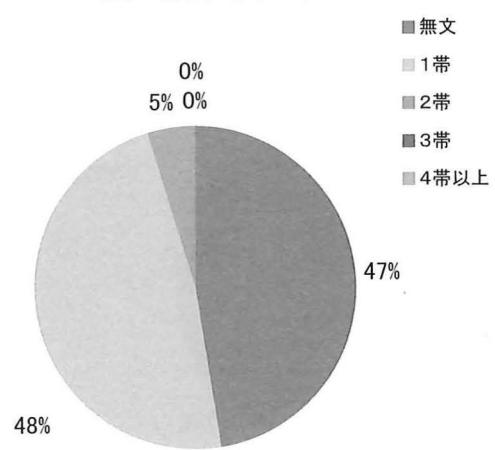
文様帶区画の種類

無区画	沈線区画	櫛描文区画	刺突列点区画	結節縄文区画
8	4	2	0	0

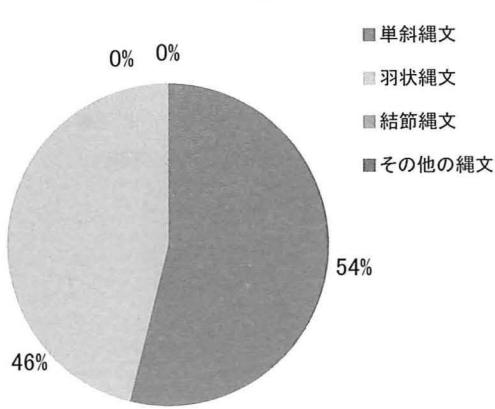
文様帶区画の種類



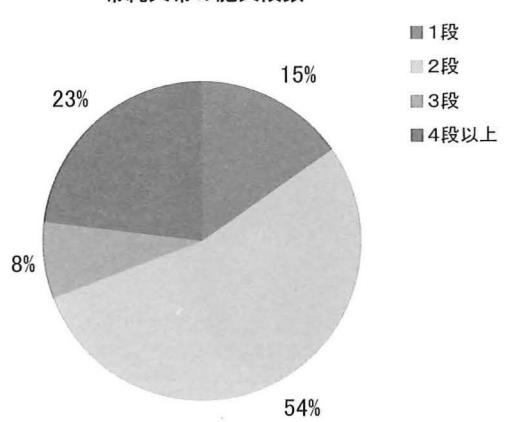
頸部～胴部文様帶の数



帯縄文帯の縄文構成



帯縄文帯の施文段数



集計対象遺構: 1区Y1号住、Y5号住、Y9号住、Y12号住

第9図 下寺尾西方A遺跡の壺形土器の文様様相(IV・V段階)

砂田台遺跡

文様帶(横帶文)の文様種類

単斜縄文				羽状縄文(交互斜縄文)			結節縄文	その他の縄文	擬縄文	沈線文			櫛描文
1段	2段	3段	4段以上	2段	3段	4段以上				平行沈線	斜行沈線	刺突列点	
3	5	3	3	8	20	14	0	0	1	5	1	0	4

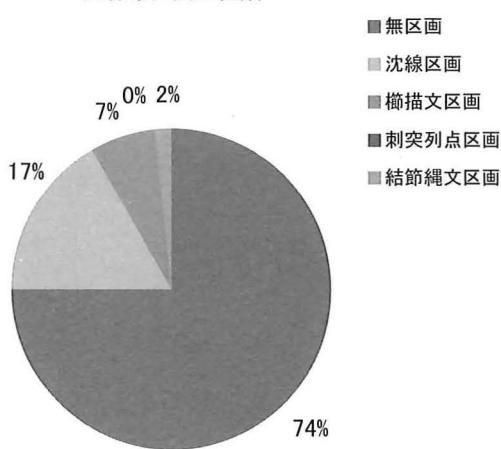
頸部～胴部文様帶の数(+mは意匠文が付加されているもの)

無文	1帯		2帯		3帯		4帯以上	
	1帯	1+m	2帯	2+m	3帯	3+m	4帯	4+m
25	23	1	4	2	0	1	0	0

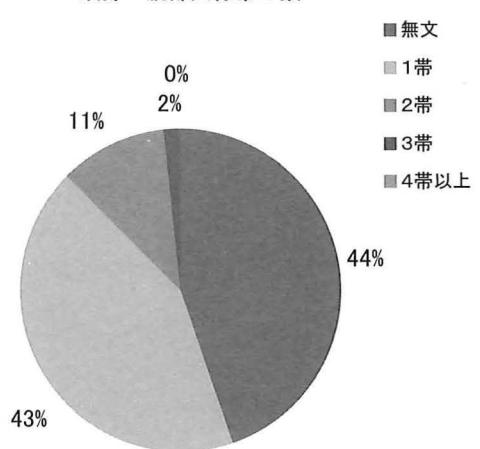
文様帶区画の種類

無区画	沈線区画	櫛描文区画	刺突列点区画	結節縄文区画
45	10	4	0	1

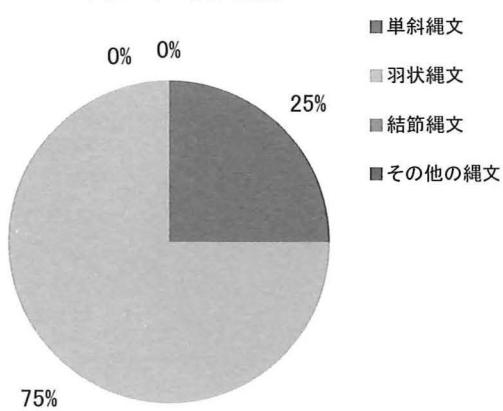
文様帶区画の種類



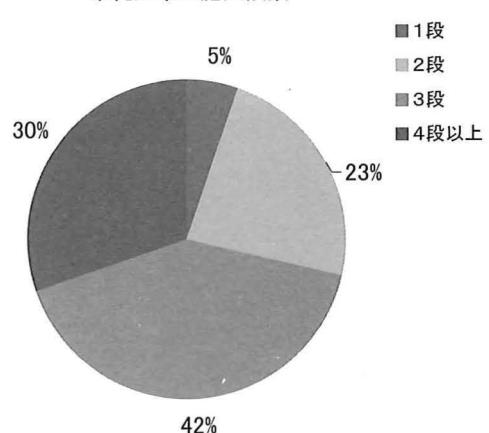
頸部～胴部文様帶の数



帯縄文帯の縄文構成



帯縄文帯の施文段数



集計対象遺構: 1号住、3号住、4号住、7号住、8号住、10号住、17号住、22号住、25号住、30号住、31号住、33号住、36号住、46号住、49号住、51号住、57号住、58号住、68号住、73号住、74号住、89号住、107号住、108号住、125号住、135号住、137号住、138号住、139号住、140号住、141号住、146号住、154号住、155号住、158号住、160号住、166号住、168号住

第10図 砂田台遺跡の壺形土器の文様様相 (IV・V段階)